ソウル国立中央図書館本『伊勢物語朱雀院髄脳』

――解題と翻刻――

金　任淑

〈解題〉

ソウル国立中央図書館本『伊勢物語朱雀院髄脳』（以下、「朱雀院髄脳」と略する）は、縦二四、九、横一七、四センチの袋綴二冊本である。濃紺の紙表紙の左上に題簽を貼り、「伊勢物語朱雀院髄脳上」「伊勢物語朱雀院髄脳下」と外題する。見返しに「羽山尚徳寄贈本」の印記があり、上巻一丁オに「朝鮮總督府図書館蔵書之印」とともに「阿波国文庫」「不忍文庫」の印がある。墨付は上巻一五丁、下巻は二一丁で奥書はない。下巻の最終丁に「文安四年四月廿九日　書写本」とあることから、それ以前に出来たものであろうが、この本は江戸時代中期の写本であると思われる。

この「朱雀院髄脳」に関しては、すでに大津有一氏の『伊勢物語古註釈の研究』に類本である桃園文庫本の紹介があって、この注釈書が古注からの抜粋であるとしておられるが、より詳しく言えば、『書陵部本冷泉家流注』[注1]『十巻本伊勢物語註』[注2]『慶応義塾大学図書館本伊勢物語註』[注3]などの一般の冷泉家流古注と共通する記述が多く、これらと同じ世界で作られた別紙口伝的性格の秘伝書であると言える。

特に、『慶応義塾大学図書館本伊勢物語註』（以下、「慶応本伊勢物語註」と略する）との関係は甚だ深いが、これは「慶応本伊勢物語註」が一般の冷泉家流古注の本体に、別紙口伝であるこの「朱雀院髄脳」を付加したものであることを物語るものである。

慶応本註は室町時代の写本とされているから、それが引用している「朱雀院髄脳」は、室町中期以前の成立ということになる。文安

四年（一四四七）書写という奥書をもつソウル国立中央図書館本の存在は、その意味でも貴重と言えよう。

〈翻刻〉

伊勢物語朱雀院髄脳　上

まめおとこの事

ひそかなりと云字をまめと読なり。貞観政要九巻云、風方君者是霊宮密夫也。此故ニ被レ誅空野亭ニシテ已帰鬼ト成云云。是は風は性(ママ)也。方君は實名也。霊王の御左丞相にして天下の政を後見し給へり。かゝるかしこき臣なれども、霊王の后呂宅妃と云し、まめおとこにて有しかば、狂知(キヤウ)原といふ野にてくびをめされしかば、つゐにたゝりの鬼となりて、城の内に罪深き事をしめしたりき。

みやびと云は、まぐはひを云也。

史記十八巻云、嘗千嶽三千人之天仙艶而得果、或以雲母練丹竈、或以紅精属紫蘭、其術疾訖。此身於松煙、心澄白雲飛落。行々至芳河之辺。聴客重々如郡鶴之処。時於江川、卒身娃仁、先嘗證士飛下而嫁見會凡意難止、三仙波落小舟似風飜云云。首山嶽者山の名也。三千人の仙人、菜を服して天仙となる。果は仙なり。艶にしてと云は、仙薬を服する事珎とぞ云心なり。雲母は菊をいふ也。菊を丹に合てかまにねる也。古撰集十三巻云、石上乙丸、春にあひてみやびにあるゝ野辺の駒ははやき心は誰に見えにしぞ、田上黒木、秋の山に妻よぶ鹿に馴ぞしもみやびにたえてやかひよ／／となく

ほにはあらでと云は、かくるゝ義也ト云事

文集第七巻云、河水常澄上、上求賢聖、虚天長隠世出慕政主。是ハ雖未現先表以如是云云。河水濁事なくして、常に其河のみなかみの山にかしこき聖こもれりと知て、其賢聖を尋るなり、賢聖みなかみをのむ故に、其水にごる事なしと云也。大虚つねにくもりて、空のあるゝ事のしげきは、世中に政わろき御門座すると心得る也。まほならずといへども、せんびやうなりと云は、まだ其人あらはれねども、其のしるし也。ほと云事はあらはれてと也。ほならずとは、かくるゝと也。古撰集十四巻云、参議安部乙庭、申さねばしる事もなしくや／／とほにこそ出ね人をこひつれ　くや／／と云は、苦き心なり。いきつぐ心也。ほにこそいでねとは、あらはれねどもと云心也。

かひまみてと云は、まぐあひと云事

古撰集十七云、柿本人丸作、天命尊岩命尊而大嶋彼是真見始契者示木　あまなつけと云は、いざなぎのみこと也。おほやそと云は、やまとじま也。かひまみと云は、まぐあひを云也。いざなぎ、いざなみふたりして、まぐあひの事はじめおき給ひきと云なり。

わかむらさきと云は、女の異名と云事

文集巻十九云、顔女嬶芳女紫麝ノ薫風。女はにほひさかり、いきほひたはやかに、紫の風ににほふがごとくに匂ひかうばしと云なり。

若草と云事は、女の異名と云。風と云は、男の異名と云事、

婦随夫、女若草靡風云云。これは文集廿一巻ノ賦也。文集白居易作なり。これよりして、男をば風と云、女をば草と云也。たはやかに、やはらか也。故に草をひいて女にたとふる也。

よもふけぬと云事、四方をかたむると云事

古撰集七巻云、太屋寧哥云、我宿は菊売市尓不在雖四方之門辺尓人左右来也、万葉十八巻云、中納言家持卿哥云、神無月時雨の雨の降度尓四方野山辺曽色付倍留　とよめり。よもと云は、四方なり。

かみなると云事

史記五巻云、秦始皇ハ暴悪銘肝、虎心良盛也。生発降塵、如雷電神破雲、侍臣走散、土藁不絶、山野似雨脉之冊、又云、天上天下揺動振塵、内官外官害利釵、漢宮焼化之煙阜。歎誰長生不老之巌損不悲云云。これは秦始王、わろき心肝にしみていかりをなす。疵をもとめ、ちりをかへして吹拂風のごとし。此故は、いかりをなす事、雲の上さうどうするいかづちの如、破雲つかまつり、人土に走ておひたてらる。走、散事、雨足の野山にしげきがごとしと云也。雲上雲下うごきさうどうして、ちりを振ひ、女臣男臣をころす事、あはれみをわすれ、漢宮三十六人の宮を作事、長生殿不老門を立てたりしかども、かゝるわろき事あしき故に、死て後、孝庄苞、軍を発て、咸陽宮焼煙三月まで不絶云也。其をも誰かなしむべきと云也。此意を、順、河原院賦に作て云、嚮秦喪而聚虎狼咸陽宮之煙行々ヶリ云云。雲の上のさうどうなれば、神なると云也。此は文徳天王のさはぎ給を云也。雨降と云は、公卿、殿上人かちはだしにて走散て尋るを云也。万葉集六巻云、すべらきは神にしませばあま雲のいかづちの上にいほりするかも、此は田上尼公が持統天皇の飛鳥内裏をみてよめるなり。是にも、すべらきとは、御門を云なり。それを神にしますと云也。又いかづちとよめ

る也。うへのいほりとは、内裏の名也。如両脉山野冊云へり。雨のふると云ハ、此本説なり。

あなやと云は、かなしみと云事

梁文皇御字、西城記五十巻云、御門、語流支三藏曰、悲哉、朕逢佛教不修。これは文皇、芬流支三藏に逢て、仏教にあふ事つとめさしむ事はかなしとの給へり。文記録二巻云、相如野草の庵喰(クワクワ)歎記(ヨモギ)ヲ年序、忽尓忘悲懐喜云云。此は馬相如、岳肴(カクカン)と云野草のいほりを結て、よもぎと云草をくうて七年の間、政恵と云三十巻の文を作て、周の孝皇に奉りたりしかば、車をつかはして、迎て、賢者臨遅曰、暴惟門に去との給ひて、国を給ニけり、天下の政をして、たのしくつかへたり。然間、悲わすれて喜を懐といへり。

あはひと云は

文選九巻云、仁義礼智信之五常者、交互不隔云云。これは、五常はたがひに交り、一にしてへだてずと云也。あわひと云は、まじはり也。新朗詠集上巻云、四五月交雲外語、二三更後雨中聲　此はほとゝぎすの四月と五月との月あひに雲外に鳴声を作詩也。二三更と云は暁声也。夜に有五更。二三更の後は四更也。此は暁也。五更は夜明とて横雲わたる時を云也。

しろくと云事は、あらはなりと云事

文集十七巻云、隠士者閉扉白、衆人明其賢一也。これは世を厭て野山にこもり、人にまじはる事あるまじき人の事を云也。か様の人はとぶなふひとなきをよしとす。此はかしこき其一也と云也。

六帖云、文屋康秀　恋になく涙の滝のしら糸のしろくは人にあはんといわまし

返ると云は、なくを云事

文集四十巻云、照君去胡国、感遥(ウンヨウニ)観漢宮ノ雲井　滴(カヘル)涙濃干タリ云云。これは王照君ゑびすにとられて、胡国へ趣きし時、はるかに漢宮の雲井にみゆるまでかへりみてなく涙こぼれをつる事を云也。

なみと云は、涙を云事

漢書十云、漢武(ママ)京已婦如身海中在小嶋涙波常観治難浮。これは漢武帝、李夫人うせて後、こふるなみだに身も沈て、なみだはつもりて海となる。我が身は海の中にこじまのあるやうなりと云也。涙、波と云は、なみだのなみと云也。万葉集十八巻云、安部竹命作、なきながす涙の波のふかき海にいさゝらばわれみるめかづかん　此哥は人を恋てなく涙のふかき海になりたれば、人をみるめ

をかづかむとよめる也。

つたの事、もとをりと云は、ちからと云事也。

伯選第五王、莫葛気榮スル事身勿燭借リテ木助ヶ脉ヲ肟力恵滋シ。依テ他助人ニ廣ク得調長スル事ヲ。此は、つたはひきおひいつくしく、さかゆることはひゝろごるといへども、をのれがちからにはあらず、たゞ、木のさかゆるたすけによりて、ちからをえてはびこりてめさしさかゆる也。もとをりと云事はちから也。古老伝云、葛藤無自力依他契栄云云。

かへでの事

文集拾捌巻仙道術記云、壺公中構乾坤服醫、長房は乗竹登青天、番引鶴飛白雲、嘉巫植花木芳香供尊、呂師練行之功、豈非懐平。此ハ仙人ニ成事を云に、壺公はつぼの内に一の天地をかまへて、其内にゐて仙の薬を服して天仙となり、費長房は竹にのりて青き虚にのぼり、王番はつるにのりて侯山のみねに来て月の前に笙をふく。声鸞吟鳳唱して、聴に無拍子多。器裳散席の声に似たりと云は、つばめうたひ、ほうわうのなくやうにて、聞に拍子とゝのをる事なし。たゞ□楽のみだれたる序のこゑに似たりと云也。乾は天、坤は地也。此事は文選ノ第五巻委はあり。嘉一巫と云は、雲洲と三国の御門也。わざと仙をこのみて小宗山と云山に入て、仙人の読經する所に至て、仙道を可栄やうをの給。仙人教て云、地仙をうべき有相。久修を宗として花香を尊供せば、九年を経て、仙に入事あらんと云也。仙阿が花香として可奉との給へり。仙こたへて云、紫桂を取て香にたき、花木をうへて花とせよと云に、如教伯王宮都ノ中に花木をにほひかほりありと云て、京の中に皆此木をうへて尊に奉る。此故に花の木と云なり。都に多く植て此所にさかへける事は、此御門の時也。此故に都の木とも云也。此本証によりて花みやこと申なり。

王位を高山にたとふる事

清和御門を富士山と云へること、これによる。師恩事、文集六十三巻云、万騎主位高而如雲の上にかしづかれ給へり。さればこそ、そらの月とあふぐ也。祖師道恩ふかしと云は、御門ニ成給へば、智恵なくは誰か御門ともちゐてくらゐにすへたてまつりて可奉仰。君依て奉教有智恵主と成給へり。民を哀て、其中に師をたて不報恩云也。万葉集第十七云、人丸作、おほ君は雲井にませば久方の大内山といふもことはり、遠鏡、白目哥云、道高く富士のみ山にのぼりきて月を袂にやどしてしかな、此しろめと云は、河じりと云所の遊女也。嵯峨の御門かはじりに行幸して美女ときこし

めしあまり、哥よむときこえければ、ひと夜めされたりけり。さて、その心をよめる也けり。御門の位高をもつて富士の御山とよめるなるべし。

御門を日と云事

史記廿七巻云、帝日光和を万草殊滋。此は御門雲上に光り多、あざやかなるを以て、日にたとふる也。月やはらかにのどかに照せば、万草とは萬の民也。皆さかへしげりと云也。御門をはしまさねば民狼籍也と云也。めぐむ人なければ、さかゆる事すくなしと云也。古今集云、藤原関雄哥、奥山の岩かき紅葉散ぬべし照日の光みる時なくて　此はことありにて、北山に籠居て久しくゆるされざりければ、宇多の天王のめぐみの告にあたらねば、我さてはてぬべしと云心をよめる哥也。照日の光とは、御門のめぐみを云なり。てる日とは、御門を云也。

日もくれぬと云は、御門の死給を云事

文集六十四巻云、帝日ハ崒(テイ)ニ没(クレテハンリヨ)万侶閣ニ深(クス)　白雲谷ニ落テ百官歎(キ)厚シ。此は周の燕皇かくれ給ひて陵頭山に葬送しける時の事を作也。崒(みね)に納奉る時、万侶とは国中の万人也。やみにまどふを云也。白雲とは白土を云也。谷にまろびふして文武百官の歎厚と云也。古今集云、深草御門(仁明天皇也)御遠忌日に、文屋康秀読ル哥、草深き霞の谷にかげかくしてる日の暮しけふにやはあらぬ　此は仁明天王の死給ひたりしを、深草のやまに霞の谷と云所にをさめ奉りし也。御門を照日と云て、死し給ひし日をくれし今日とは云なり。古撰集十一巻云、小田達皇子(此は神武天皇第四皇子也。)　神武天皇御没時よませ給へる哥、明けき照る日暮ぬ今は我よる照す月の影を頼む　と思ひけん哉　此は明きてる日は暮ぬと云は、父の御門の死給をよまれたる也。てらす月と云へるは、母皇后を申給へるなり。陰陽を分つには、日は男、月は女、ひるは男、よるは女にあたる也。されば照す月とは、御母のめぐみをたのむとの給へる也。文撰第四云。堯日暮て舜風和なり。是は堯帝死給を堯日くれぬと云也。其後位を舜王にゆづり給を云也。

公卿を月のさと人と云事

史記云、三槐九棘蓋朝雲上に出て暮に月に帰る。光採而日続塵土照。三槐ハ大臣の名也。九棘は納言也。殿上に昇殿して日めもすに天下の政をさだめ、夕には月を待て私宅に帰ル。めぐみはすくなけれども、御門の日光につゐて民をあはれむ心あり。此故に月の里人と云也。月卿と云も此ゆへなり。古撰集十七巻、人丸哥、

かげ清み民をあはれぶあまりあれや日のうしろ照す月の里人　これはめぐみかしこくして、民をあはれむあまり、御門のうしろにて人をてらしはぐくむは公卿也とよめる也。大臣大納言天下後見として政を定なり。日の後をてらす政に月の里人と云也。里とは内裏の外を里と云也。されば里人と云なり。

殿上人を雲の林と云事

古撰集第三哥、久かたのあめのめぐみのしげければ雲の林は末もさかへけり　此は小君家持中納言、御門の御めぐみにあづかりて文武天皇の御時さかへしをみてほめてよめる也。雨のめぐみと云は、空のめぐみと云也。あまたさかへたるを雲のはやしと云也。

公卿殿上人を星林と云事

費長房春秋魯ノ記一巻、縦我仕仁帝者属費姓之民、君倍上階登星客位ニ陪連レルト侍臣之筵ニ奈進ンテ上之室ニ、忽寿久昇雲ノ徳用在乎。費者姓也。長房は字也。仙をえたる事を悦也。仁帝は御門の名也。上階は大臣位也。星客はほしの位也。侍臣は公卿殿上人也。上位は仙人也。寿久は命久也。昇雲とは天をとぶ徳用也。後曹書一巻云、楊貴妃依有天朝之寵、楊国忠速階星林位、賢政を奪て致梟悪計、終為安緑山於馬嵬乃亨被害矣。此は楊貴妃、玄宗皇帝の寵愛あるによりて、貴妃の兄、楊国忠、左大臣に成を星の林の位にかなへりと云なり。さかゆるをもって、はやしと云也。かしこき政をそはで安緑山をさしをいて、わろき政をなす也。梟悪の計とは、わろきはからひなり、遂に安緑山、兵をおこして馬嵬と云塘の辺にて軍をして国忠を敗る也。古撰集巻第云、秦之樹哥、したでらす春の日影ののどけさに星のはやしは花咲にけり　此は聖武天皇の末、春宮にて御座の時、かしこく人をめぐむ御心のありしかば、公卿殿上人、皆悦てつかへてゑいぐわを開しをみてよめる也。春宮をば春の日宮と云也。日にたとへて春宮めぐみをはるの日かげと云也。のどかにて照すしるしに、ほし林はみなはなさきにけりとは、人のゑひぐわ開を云也。したでらすとは、下精をあわれむ御心を云也。万葉集六云、田上尼公　天の河雲の波たて月の船ほしの林に漕かくされぬ、是は雄畧天皇あまりわろくおはせしかば、月卿雲客おこりてもちゐたてまつらず。つゐに、おしこめたてまつりぬ。雲の波たてと云、雲客をこるを云なり。星の林にこぎかくすと云は、をしこめておく也。されども月哥に入たるなり。月の舟と云は、空にて川に流れゆく月はにたれば如此云也。

御門を船と云事

史記十一巻云、大公主政賢直也。恵波流外千万涛、貴賤渡世事、

能妙。故号船筏。誰不仰。大公主は御門なり。政賢質直と云は、政かしこくすなをなるを云也。恵波と云は、めぐみの名也。流外万涛とは、ひろく外までのめぐみの波流れて千万のなぎさに至ると云也。貴賤渡世と云は高きをもいやしきをも世をわたす事也。事能妙と云はよを妙にわたす心也。故号船筏と云は、此故にふねいかだと御門をなづけてたてまつる也。誰不仰と云は、誰かあをがざらむと云なり。文集十三巻云、大主能渡政化、人倫故名王船。おほやけはまつりごとをかしこくして人をわたす。かるがゆへに、御船と名付たてまつるなり。貞観政要七巻、引古語云、君如舟臣如水、々能渡舟、水還顚舟、在能随君臣還君己有。此は万騎の主は臣下の用るによりて主となる。王と成て人を渡すは、只臣家のわたさするにてある也。臣、君にしたがへばとて、君はこりて無道をまつる事なかれ。臣かへて君を亡す事也。水、舟をわたせども、水又かへりて舟をくつがへす事あり。水にしたがへる舟はかへる事あたはずと云也。王、臣家にしたがふ事すこぶるあれどもと云也。是にも御門を舟と云也。位下位に成て院号なりぬれば、空舟と云は、人をわたす事なければ也。

渡守は関白云事

臣政傳二巻云、大政侍臣三家ノ主ハ進レ行質心ヲ護ニ天朝ヲ一。渡守ス倫ノ如不苦託舟。臣政傳と云ハ大臣に家の政の巻物を記傳たる文也。陳鴎の作也。御門御ふるまひをすゝめ、わろき政をおしなをして御門をまもりたてまつる也。御門の御心にまかせて不当政をゆるさぬ也。是はわたりを守る者の舟をつないでうしなはざるごとく成べしと云也。されば渡守と云也。関白は政をおさめて、御門を守り奉れば、舟を守るによりて渡守と云なり。

伊勢物語朱雀院髄脳巻上

以上廿三ケ条

伊勢物語朱雀院髄脳　下

御門をみやこ鳥と云事

文集巻第十九云、朝今持晨翼翔遙雲路、天下果白在飛而如鳥。御門は政よければ主と成て高位にかけり給ふ。是ははねなけれども、高くかけることは政をはねとする也。自在を得て進退するを、飛て鳥のごとしと云也。

きつにはめなでと云事

夜も明者狐尓喰為天小家鶏野未尓鳴て男夫於遣津留　是は万葉集の十六巻に、近江の采女哥也。只此文字に付て義をば可心得也。

ゆみやなぐひをひてと云事

将軍記一巻云、呉皇雀越掉二篇舟一。是は宅遺公兵戦之賢也。宅没孝皇發尅、宅妃入后。未三年貳玖廻之候計ト貫而テ、孝兵ヲ打均、則身ニハ雖為妃、艶甚賢心持テ、弓箭ニ武如ニ戦客一矣。是は越皇の時、異国を打に、宅遺公と云兵のたけき者ありて、遂に呉皇を打おとして国をしたがへたり。是は君の兵の賢ければなりと云也。篇舟に棹さすとは、呉皇たゝかひにまけて小舟に乗て五湖の波をこぎ行を云なり。宅公死て後、孝皇軍を発て呉国をせむるに、宅公の娘一人あり。越王の后にまいて三年と云に、此軍発也。二九廻のこうと云十八の年也。此后、計賢、自ふせぎたゝかはねども、孝皇兵を平げつ。其計は海につなをながして、上に土をはこびて人をおとし、おほきなる宅をつくりて、そのなかに人をこめて、大きなるやをつくりてはなち、水に毒薬をいれてあたふるに不死と云事なし。計かしこく心たけくして武道に長ぜりき。然間、心に弓箭をたもてりと云なり。只たけき兵の心あるをば弓箭もつと云也。

さがなきと云事

老子經云、仁礼等五法世行也。是五常は、よのふるまひなりと云なり。行と云は習ともふるまひとも云義也。又つとめとも云なり。いづれ同義也。

いさかなると云事

文集第廿巻云、縦千秋ノ月ヲバ詠而披世事、西風来去来。縦万春花ヲ折而跌ニ栄葉、北露置テ消ナバ二不帰。論否誰カ非答ヲ。是は無常ノ句也。無常ノ風西より来と云也。きゆるみの水は北へながると云なり。西風北露ノ喩は是なり。いさかなりと云は論ずる事也。是は只いさかひの義也。

男女七歳の中に必とつぎをはじむる事

陰陽記云、夫婦交會陰陽天地之法也。随合成躰長五行。和合而結躰。成後、合随而躰堅也。則是五根五識ヲ結ビ而弥長倍。故小男小女七歳之内和合之嫁始。業平は五歳にて此事を始給たり。是故に合和嫁とかきて、かはつるひとよむ也。これはからのよみ也。

にゐ枕と云事

古撰集第九巻、通衣妃哥、秋野夜も夫手敷て寝為夜波長物共伊津小思之　万葉集十六巻　坂上郎女哥、鳥玉之我黒髪毛不乱尓結定余小夜之夫手　古撰万葉集等の集には、男の手枕とよめる也。男は女の枕にすれば男の手をまくらとする也。六帖等の集に

は手枕と書たり。にゐと云は、あたらしきいまはじめたる事をいふ也。万葉集七巻云、今年行新嶋守波人於之毛見目之数毛知不登曽思　ことし始てゆくあたらしき嶋守は、その嶋の中のみるめのかずしらじと云也。それを人をみるめとなぞらへてよめる也。万葉集十六巻云、家持中納言、千葉破千々野神達耳誓言懸我不廢登妻尓言勢余　是はちゞの神達の前にちかごとせさせて我をわすれじともいもにいわせよとよまれたり。

ゆみづるのこゝろと云事

古撰集第十二巻云、山辺赤人哥、梗懸賎男代夫子賀弓絃野小々呂保曽久毛中絶尓遣里、是は女に中絶て後やる哥とかける也。弓はその心ぼそきになぞらへてよめる也。心と云は、ちゝまきとよめる也。

かへりごとゝ云事

古撰集第十三巻哥、不相登波誰故燈留我思曽想事於野人尓懸麻之　此は、かへりとよめる文字はかこつとよむ文字也。さればかこち事をかへり事と云也。

ともちけちと云事

ともちと云は、ともし也。けちと云は、けし也。ともしきゆる意也。文撰十六巻云、四大所成命類水辺之燭、五温仮令質如風前之雲。是、命をほのをに喩へたり。さればいのちのともし也。文集十五巻云、語真寺作云、老風頻扇而寿燈欲於消。是は老風来ぬれば、命の燈きゆるなり。涅槃注非佛品云、命火消吹形水登烟。是はいのちの火は風にきえ、形の水は煙になりて昇と云也。万葉集　巻第十九云、易消人之登火之計知如礼波暗木夜道尓宜迷遣里、是も命のともちとよめる也。人の死ぬるをともちと云也。

しでのたをさの事

古撰集六巻云、櫻田利長朝臣、宜爲古曽士田之田長登名津気々礼業田早来子登呼渡気留　士田と云は田をもよをすとよむなり。業田とは、たつくるとよむ也。早来子とはとくきけことよぶ也。これはほとゝぎすは、五月のころ、此さとに出て、田つくれとよびわたる也。此心をもて、万葉集云、いくばくの田をつくればかほとゝぎすしでのたをさをあさな〳〵よぶ　田をつくるたゞ也。万葉にも、田をもよほす心をよめり。しでの山こえてきつらんほとゝぎす恋し人のうへかたらなん　此哥のやうは、しでの山をこうるとよめり。しでの山に田をつくるゆへに、しでの田をさをあさな〳〵呼とはよむべき。古撰には、士田とかけり、此は田をも

よをす心心なり。しでの山をこうと云は、田をもよおしに、やまよりこえいづるを、しでの山をこうると云なり。郭公はかならず四五月の頃に成て山より出る也。うるはしきしでの山とて死ぬる人のこうる山をば死路山と書けり。しでの山と云に付てなずらへよみなせる也。此義ならば、万葉集云、時鳥鳴なる夏の山べにはくつでいださす人やあるらん　此哥はもずの来て郭公のくわらをなさぬをはたると云なり。此義をばいかゞ心得べき。答、是は非義也。万葉集にかけるは、業田早来子鳴名留夏野山辺尓波玖殖田不レ致人哉有賢　とかけり。是は玖殖田とは、田をかきうゝる人のなきやらんたづいりにとく来れ、ことなくはと云なり。只実を隠がためにくつぬひの義をつくて云也。亦、万葉集に、うろぢよりむろぢへかよふほとゝぎすとよめり。如何心うべき。此よをば、うろぢと云也。死する道をむろの道と云也。ほとゝぎすは九月の頃、山に入て寒風にあたりてたへがたき故、木の中のはさまに入て物喰ざるによりて必死ぬる也。されども、くちする事なし。さて、夏いきいでゝ此国に来也。抑此郭公は首雲国と云南之国よりきたるとりなり。此故、此鳥死てあるが南の風殊暖に吹時、我国の風薬にて生出て驚て、山を出て里に来て鳴也。死たる時をむろちと云也。生出て此国にくるをうろちに通と云也。何にか郭公南より来ルと云本証有哉。史記二巻三、郭公去二南喜一来レ以後永不帰。暖風待発レ気。南喜は郭公昔往の南の雲国也。海に出て遊程に、かぜにふかれて北国に来れり。彼南国はいつとなく暖なる国也。此北国は寒によりて、秋は山に入也。夏はみなみより来る也。是故、漢書云、胡馬嘶北風、越鳥栖南枝と云へり。是は漢王胡国を打て、馬を取て唐に帰る。此馬胡国は北国なれば、恋て北に向て其国の風の吹時、悦をいなゝく也。郭公は南州をこひてすくふとき、南枝にくう也。又唐国に郭公とはいわずして、郭公と云は何か可得心乎。これも郭公と書て、はたゝるきみとよめる也。義はいづれもたがふ事なし。

いほりあまたと云事

古撰集十巻云、田辺福丸、夫結多木士田之田長野身尓有登不相波悲婦尓一夜も　いほりとは男する事也。郭公は男にあひて互に嫁する事しげき也。餘り切なるあまりに、鵞にも嫁と万葉集の注にあり。

おかしきと云事

史記十巻云、形霊皃麗者常象天客之愛。意阿言悪者鎮得鬼魅之伐能。みめよきものは、天人其人をいとをしみあわれむなり。心まがり言わろきものをば鬼魅其人をにくむと云なり。うつ

くしき事をおかしとよめる也。

女と云文字を鬼とよむ事

文撰十巻云、老子行白露林之頭、王搽之在処見老女矣。此は老子の白露林を行に、彼林の中に仙人の捨たる玉の机の有所に、老たる女のあるを見て問給ふに、我仙をわすれて机の本に臥たりと云也。何によりてか仙をわするゝと云に、婬事を思ひ出せるによりて、仙をわすれて我かりしよはひもとの凡身に成。時へたる年、顔あらはれて老耄の形ばうあらはれたりと云也。老子教てのたまわく、皆婬事におゐては凡夫のわするゝ事なし。仙も凡身也。然ば汝思へ、仙本よりあらば、二度凡人に可成かといさめたまへり。大和物語云、みちのくの安達の原のくろ塚におにこもれりと聞は誠か　此は中納言源宗行の娘、みちの国の安達の郡黒塚と云所にありと聞て、京より家持中納言のよみておこせける哥也。此も女を鬼と云也。

花橘と云事

漢書廿巻云、涙雨漸潤興芳七尺之盧橘、纔傳古神頭髓脉貫、苑萑二丈之薄花疾迷ハヤヲ後心。此は唐国に典夫興芳と云二人のものと有。興芳は妻也。死て後、典夫悲てうづめる塚に行て泣悲事限なし。去程に七日をへて、一の木、塚の上に生たり。是橘也。高くなる事七尺也。なれるこのみつねにかうばしかりけり。昔、うせにしつまの匂ひ香に似たりければ、其香をわすれじとて、此橘のみを袖につゝみて失ふ事なし。自此花橘の香と云事はあり。五月待と云は、五月に成てくう物也。されば、五月まつと云也。又、唐国に苑萑・婁主と云二人あり。苑萑は妻也。此妻死て後、不知行所、いきうせにければ、死てや有覧、いづくに有覧となげくほどに、三月ありて、夢にみえければ、野の中に死かばねあり。かうべをつらぬけるすゝき高し。是を尋て後世をとぶらへと云。夢さめて、行て尋ぬるにおしえしごとく、野中に白きかうべあり。だいにつらなりてすゝき生たる事二丈。をばなをみて、悲て心まどはする也。

あまになりて山に入と云事

此は星の宮の口傳也。業平、うさの宮の使に行くに、小野小町にあひて、昔の人の袖の香ぞすると詠ずるに、思ひ出て尼に成て山に入とあり。是、大なる不審也。其時尼になりて山に入たらんには、さてこそ有べきに、大江惟章死て後、住吉にかへりて、もとかげの御子の御許に来けり。其時も女にてあり。さればこそ、業平もあひてわれにあふみをはなれつゝとも、よまれたれども、か

れは、実にあまに成にはあらず。只髪をおろして後、かなはねば病に入を云也。是はかみをおろす也。その故は筑前の国に大嶋と云処に星宮といふ社あり。彼社は河を中に隔てうらうへに宮あり。東はたなばたの宮と云、西をばひこぼしの宮と云、中なる河をみそぎ河と云也。其宮の神人をばほしの宮人と云也。此宮には皆神主有。七夕の宮には女のかぎり宮司にて有。ひこぼしの宮には男のかぎり宮司にて有也。男をほしく思ふ人はひこぼしの宮にこもり、つまをほしくおもふ人は七夕のみやにこもりて申也。

つくかみと言事

史記七巻云、瓊有夫婦。云ヒ夫ヲバ遊子ト、婦云ヒ伯陽ト。子ハ百二餘レリ、陽百二一レ足。契二階老一者二八之候、陽三四之句也。愛二玉菟一而終夜坐二道路之口一。暮ニハ倹二遠キ郷一、暁登二山峯一。挙下事業ト而シテ勿絶。斯二陽没之尅一、深レ契而月前進得二相観一。依二此執一獲二天姓之果一、生二織女牽牛之二星一。主二男女会合之媒一。夫ハ号二讀夫神一、婦名ク続婦神ト。然而後生二道祖神一再来二隠陽之国一。瓊と云は、国名也。階老を契と云、妻夫になるちぎり也。二八之候とは、十六の年也。三四の旬とは十二歳のころを云なり。男十六、妻十二の年より契を結也。玉菟と云は月名也。月を愛して夜道の辺に立明す也。暁は月の入るに随ひて山の峯に昇る。漸夜明て、月を見うしなひて又家におり来る也。天性の果と云は、天上に生るゝをいふなり。つくも神と云は、女を守る神と云義也。つくい神とは男を守る神と云心也。ある義に云、続と云文字をばあたらとよむ也。されば女をあたへ、男をあたふる心とも云也。続字をあたらとよむ証拠に云、漢書廿巻云、貧続戝者入覺之其一也云云。入覚と云、仏に成事也。陰陽の国に至と云は、たつけの神と成て、此下界にすまう事を云也。委尋たれば、おとこの遊子百二歳、妻の伯陽九十代の歳也。妻の陽しなんとするとき、同穴の語昵しければ、別れ悲とも云量なし。汝死なば、我何事にてかなぐさみて、獨り月の夜毎に来て汝にみゆる事をうべしと云へり。然後死ぬ。是を野に送置と思程に、俄に思ひの外に、此死たる妻うせにけり。恠を成す所に年頃かひけるからすの在けるに乗て、そらを飛行とみつ。其後、此男ひとりこひしがりて泣よりほかの事なし。されども契し事なれば、終夜月を見るにこひしと思ふとき、妻の陽鳥にのりて来て、僅計相見事やまず、かたらへども物云事なし。子かなしみて、我只願は、はやく死して君と一所にあらんと云。遂に死ぬる事なくて男切に成まゝに物に成ていきながら、白きさぎのそらを飛をみて、我つまそらにそあんなるとて、さぎにのりて飛行程に、天に行て相見に、中をへだてゝ、此妻常に烏に乗て飛あるけども、天王の御ゆるされもなくして、こひし

がれどもかなわずして、河をへだてゝ二つの星と成て、恋しがりて有也。あまりこひしがる程に、天王のゆるされをかうぶりて、七月七日に逢事、年に一度也。かならず此日を契る事は、此帝釈不沐水。此故也。帝尺瓶を以て宝をふらすに、かならず一日に一度天川の水を彼かめにそゝぐ。此故に帝尺河にのぞむ日は水たかうして河をわたらず。天衣皆眷属共にはたらく事なし。七月七日に帝尺皆善法堂に入堂する夜也。此ひまをもちて其日逢也。乗れる物なれば、烏と鵲をあつまりて、河にはねをひるがへして橋にわたすと云也。木葉をくひて肖の上におゐて、はねのひまをあわすと云也。木葉の義につひて、もみちの橋と云也。此故に漢書傳廿一巻之烏鵲橋の口敷紅葉二星座形前風冷うらゝかなり秋風すゞしき心也。。此故を以て女は烏をかうことなかれ、くうこともなかれ、不可近付男にわかるゝ也。男を恋也。男は鵲をこうことなかれ、くうことなかれ。思ふ女にあふことかたしと云也。この恋になづそふ故に、七夕に男ほしからんねがひをみてばやと誓也。女の幸を守給ふ也。牽牛と云て牛をひかへ、織女と云てはたををる事は、只むかしのふるまひをあらはすばかり、又つくも神と云は、伯撰五巻云、弧猟狸狼之類年序久暦而自在致百年各成百鬼莅行神。或淋術放火悦人逢致恠崇。此はきつね、たぬき等のもの百年になる時、鬼神となりて、夜あるき人にあはんと恋しがりて俤にみえて人にたゝる也。百年になればかやうにたゝれば、九十九年よりは崇始也。つくも神と云は、付恠神と云也。人につけばつけと云ひ、たゝればわろきもなれば、もと云也。引合てつくも神と云なり。后の業平のおもかげによるきてみえ給へば、我を恋しと思へばこそ、よるあるきておもかげにはみえ給へ。さればわれにたゝり始給といはんとて、つくも神の哥をば詠ずるなりと云なり。されどもさき〳〵のひこほし・たなばたの義は、正義に相かなへり。つくも神とは女を守り、女をあたふる神也。もゝとせにひとゝせたらぬとは、伯陽九十九歳にて死しを云也。烏に乗て来ておもかげにみえて、それを今我をこひしとおぼしめすは、后のおもかげにみえ給ふと云也。

むばらからたちの事

漢書十九巻云、辱如出賢仁前、痛如入荊棘中。ものいたましき事にはむばらからたちの中にいれるをもちて、むつかしくいたましき事に云也。なれば后むばらからたちにかゝりてと云は、いたましく、おぼしめす御心を云也。

ちいろある竹之事

史記六云、稽相千丈竹能経耳日月懸葉間。栄長年重而露滴

滑也。門前ニ生レ市、呑レ彼者ハ得上寿嘲ニ北命一ヲ。影ヶ豊流而笋孫復添数倍千守矣。稽相ハ者入字也。父歌土(カンドノ)僚廬(レウロ也)。いやしきことかぎりなし。其子にけいさうと云おのこゞあり。山に入て木をこるに、山の高き所の峯に雪ふかき中に鶴鳴事あり。不思儀の思ひをなして尋行て見るに、峯の厳屋あり。雪中に白雪ありて、鳴事かぎりなし。厳屋の中を見るに年閲たる老翁あまたあり。薬を含て服す。見るにいわやの中仮庭限なくひろし。一本の竹あり。高事、言語道断にしてさかへたり。葉の間に月日出てかゝやく。葉のある毎に、仙人登て住せり。かの竹に薬をかけたり。葉より露こぼれをつる事あまねし。其露にあたる者は皆命長じて仙に入。此故に仙人あつまりて、其露をねぶる。皆上寿を得たり。其露をねぶる。鶴又仙を得て雪の内になく也。彼薬と云は雲雞散と云也。それは菊をうすにつゐてかつらの屋にゝねりたるもの也。此心をもちて長房が狄亶記云、稽相素仙竹門生(クリ)ル。此は仙をならひて。我家にかへりて門に竹を殖たるを云なり。漢書七巻云、雲雞練桂化白醫(ウハイ也)。雞鳴(イテ)天高仙家雪(ル)とつくれるも此心なり。けいさうかしこにして、仙をならひて我家にかへりて門に竹をうへて此薬をわくるに、おいのぼる事千丈也。我其はの間にのぼりて雲にたかく唑(ザ)してをり。雲にたかければ、日月を身にまとへり。さかへぬるは、影(影歟)おほければ門の前に人あつまる事、市のたてるにたり。そのしづくにあたるもの、たのしくさかへて長命を得たり。年々にたかんなひこさして竹千にをよべり。此をためしにひきて、業平はいやしけれども、その一門、貞数(サダカズ)の御子むまれたれば千丈の竹のごとくおひのぼりて、雲井たかくさかへ、月日を身にまとうべし。月日とは御門を云なり。さだかた(ず歟)の御子、位につかせ給べしとよめるなり。おやにまさるは竹の子也。されば、けいさうも我子なれども、ちいろの竹のごとくおいのぼりて、即位有て我にまさり給べしと云也。夏冬と云は、なつは萬の草さかへ、冬はよろづの草木かれかわるを云也。されば、夏はたぬしき人、冬はいやしき人也。我が門と云は、我一門を云也。我氏を云也。我子にてさだかずの御子いでき給たれば、たのしきいやしきなどかそのかげにてすぎざるべきとよめる也。

ものたきと云事

漢書二巻云、天山嶺岳ハ瀧下(ソチテ)如レ雲ル。此は唐の天台山の名を天山と云也。五岳の峯有。五岳の中に岳より滝をちて雲のごとしと云なり。是はものたき也。孫興公が天台山賦巻云、嵩山の中岳に瀧下長(ソチハレテ)如レ雲ル、天妃常洗ニ不浄之侘(クエヲ)、飛来日(事)三度也。注、天人来て不浄のあかをすゝぐ事、一日に三度なり。侘と云は、もと云なり。このものをすゝぐ故にものたきと云也。天台山の賦は卅巻の

文也。一々地なぐるに、金玉の声なり。然者、彼賦はあやまり有べからず。亦天台山の高巌をみれば、四十五尺の波白しと云へり。高巌とはたかき峯也。天台と云は、天にひとしき山なればなり。嵩山と云も皆高き義也。此たかきは四十五尺なり。ぬのびきのたきは　長さ廿丈と有。されば、そのたきものよりもことなりとはいふなり。

かさ一二と云事

陰陽記云、以金剛不動爲加佐以胎蔵柔和爲故佐云云・金剛の不動とは男也。加佐と云なり。天竺には男を云なり。女をば故佐と云也。古撰集十三巻云、素盞烏尊御哥、堅置之大嶋根野始余里加佐男故佐女野契不爲絶　といへり。されば日本国を始おきしより、いざなぎ・いざなみのみこと、あめのうきはしのもとにしてまぐはひそめしより男女の契絶せずとよめる也。されば、かさ一二と云は、男一り二りいできたると云心なり。

あまのさかてと云事

陰陽記云、天泊卯真言之二手三指をうしろ合て小指をかたへに唵。日月変、逆咀成就、そはかと唱へて、後手のうしろを合せてたゝき、ゑの木の枝を以て月日のさかさまにかいていわんと思程のゆび、て、又手のはらをあはせて唵、逆天神と唱へて三度おどるべし。是は日の出る時、月のいづるとき、月日向てするなり。手をうしろに合て打拓き、ゑの木をもって月日をさかさまにかく也。天に向てする事なれば、そらをあまと云へば、あまのさかてと云也。是は人のろうと云事也。咒詛の秘術をろかに人も知らぬ事也。陰陽道の人もおそろしき秘事にておぼけに人にも不伝事也。

ほの〳〵と云事

真言経云、若野〳〵なり、若野〳〵と云は、天竺の言也。唐土にはほむじて二義あり。一には明の義、あきらかなる義也。二には幼の義なり。おさなき義、わかき義也。人丸のほの〳〵とあかしの浦とよめるはわかき義也。今、伊勢物語にほの〳〵とあくるにかへりけると云は、あきらかなる義也。

しぎのおほきさと云事

史記巻二、漢祖皇誇司宜公、龍顔衰而、首傾半月。秦武帝字巌仙。周馬の冠崩而額豊深。彼祖皇者漢高祖也。孝皇とたゝかふ事三年なり。四懸の軍をやぶりて打取て、百官をなし、天下平安也。此故に司宜公とは、つかさよろしと云義をもって司宜公といみするなり。龍顔とは竜のかんざしと云義也。祖皇の父大

公の御門の后、花みんために、龍門の堤のほとりに行たりけるに、そら俄に曇て、后の上に黒雲おちさがりて、人近付ことを不得。竜くだりてとつぎしてはらみて漢の高祖をうみたてまつる也。其後にうらうへのほうにいろけをいたり。此故に龍のかんざしと云て御門を龍顔とはいひ始たるなり。かゝるいみじき御門、大王にて四縣をたいらげ、百官をよろしくなしさだめしかども、年をひ、おとろへてまゆかたぶく事、半月のゆがめるごとくにと云なり。秦武帝は、父秦の恵皇のきさき、ある夕ぐれにて、三四宮にして西のたいなり。仙ののれる馬おりきたりて、人にみえずしてとつぐ。これよりはらみて、この御門をうみたてまつる。かしらに馬の耳二つあり。遠声を聞事、千里もなをきはまらず。かゝるふしぎの御門なりしかども、年をひおとろへて百歳になる時、此馬の耳やぶれうせて、ひたひにたゝめるしはふかしと云也。されば、しぎのおほきさなると云は、やうぜいの御門お、しぎわうのまし〳〵し程に、大王にておはしますと云心也。大王と云はかしこき御門と云也。されば陽成の御門をしぎわうの程に大王にておはしますと云心あり。又一義云、漢祖傳と云文には、此司宜皇は、面一尺八寸、たけ一丈なりとしるせり。此陽成の御門はおもて一尺五寸、たけは八尺なり。されば、たけおほきなるをもつて、しぎわうの程なりといはんために、しぎのおほきさといふ也。

伊勢物語朱雀院髄脳下終

以上廿三ケ条

文安四年四月廿九日　書写早

（注1）片桐洋一『伊勢物語の研究〔資料編〕』（昭和四十四年、明治書院刊）所収。

（注2）『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊　一』（昭和六十三年、八木書店刊）所収。

（注3）長尾一雄「定家流伊勢物語註」（慶応義塾大学国文学研究会編『平安文学研究と資料―源氏物語を中心に―』昭和三十四年、至文堂刊）。

（キム　イムスク／釜山大学非常勤講師）